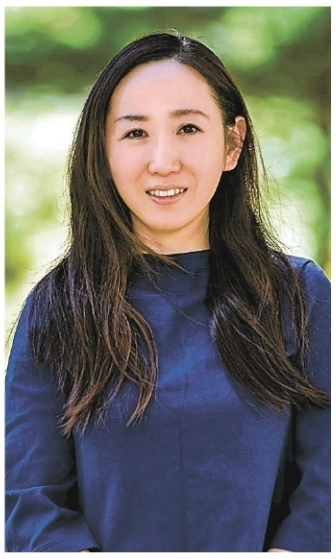
ふくしま アート新世代 ◆9◆

美術作家 **鈴木樹里さん** （郡山市出身）



国内外で活躍する鈴木樹里さん©Chad　park

「しゃもじ、瓶、片手鍋。毎年夏、震災後の古里福島を巡り、要らなくなった日用品をもらう。アムステルダムに暮らしていると『福島は残念だったね。住めるの？』と聞かれる。欧米の人にとって日本は遠い国。集めたモノを見せて、海外と大して変わらない日常を送っていると伝えたい」

県出身者として、日本人として、海外で暮らす人として。郡山市出身の美術作家・鈴木樹里さん（三五）は独自の視点で世界を見つめ、自分の〝場所〟と異なるもう一つの〝場所〟の関係を捉えようとする。

二つの「場所」

福島と海外つなぐ

「海外で暮らしながら福島に対して何ができるのか」。そんな思いを胸に、猪苗代町出身の映像作家・古田晃司さん（三三）と県内を巡り、風景を撮る。東日本大震災以降の暮らしについて女性たちにインタビューし、日用品を引き取る。二〇一六（平成二十八）年、歩いて集めた〝福島の日常〟を並べ、空間を生かした芸術作品、インスタレーション「DRIVE IN FUKUSHIMA」を作り上げた。

東京で被災した鈴木さんは留学先であるオランダ・アムステルダムにすぐ帰らなくてはならない状況だった。帰宅中も帰宅後もずっと古里のことを考えていた。心に浮かんだ制作テーマは「Being Double（二つの場所に同時にいること）」。「二つの場所に同時にいることはできない。けれど、過去に訪れたり暮らしたりしていた場所について思いをはせているとき、体と気持ちは別の場所にある」

今年は「파편 Fragments（ダンピョン フラグメンツ） 断片」を制作した。韓国の平昌に四十日間滞在し、山に囲まれていて孤独な場所であり、風景が県内に似ていると感じた。一週間で現地を巡り、残りは制作に打ち込んだ。

「日本人の私が韓国にいて何を感じたのか伝えられれば」。現地の山から切り出したスレートの石、自身の生活で使っていた物干しざおと現地の木を合わせたもの、平昌と県内の山を対称に並べた写真などが並ぶ。バッグには滞在中に記したエッセーやスケッチを収める。

幼い頃から工作、作文、被服など「ものづくり」に夢中だった。郡山市の小原田小、須賀川市に引っ越し須賀川二小、須賀川二中、安積女子（現安積黎明）高、東京理科大工学部第一部建築学科に進んだ。都内の建築設計研究所に勤めた後、二〇〇八年にアムステルダムの大学、大学院に留学し空間芸術を学び、現在は県内、東京、アムステルダムを拠点に制作活動をしている。

「調査、観察するような視点で制作している」。作品に現れる鈴木さんの視線は、見る人にある〝場所〟の新たな一面に気付かせてくれる。

＝次回は1月掲載＝

鈴木樹里さん、古田晃司さんの共同制作「DRIVE　IN　FUKUSHIMA」2016年

鈴木樹里さん「파편 Fragments 断片」2017©Chad Park